〈研究ノート〉

1948年度文部省教科書局実験学校における社会科カリキュラム研究の傾向

―「文部省実験学校研究発表会」（1949年6月）に参加した社会科担当校の研究成果を手がかりに―

篠崎正典*

1．はじめに

本稿の目的は，1948年度に文部省教科書局が指定した実験学校における社会科カリキュラム研究の傾向について，「文部省実験学校研究発表会」（1949年6月）に参加した社会科担当校がまとめた研究成果の分析から考察し，1948年前後の成立期社会科の実施過程の一端について言及することにある。

成立期社会科は，1947年に刊行された『学習指導要領一般編（試案）』（以下，『一般編』）が，「その地域の特性や学校の施設の実情や，さらに児童の特性に応じて，それぞれの現場でそれらの事情にぴったりした内容を考え，方法を工夫して」[1]各学校が自主的に教育課程を編成することを奨めため，1948年以降，各学校で多様な実践が展開された。そのため，この時期の社会科実践は，これまでの社会科成立史研究で注目され，多くの研究成果が蓄積されてきた。この時期の社会科実践について，先行研究では，コア・カリキュラムのコアとして展開された実践は，『学習指導要領社会科編Ⅰ（試案）』（以下，『要領Ⅰ』）に批判的であったコア・カリキュラム連盟が構想した「民間教育運動団体の中の社会科」という位置付けがなされてきた[2]。よって，文部省は，コア・カリキュラムには批判的な立場であったことが指摘されている。しかしながら，具体的に，文部省がコア・カリキュラムに対して，どのような立場から研究を進めていたのかについての分析は行われておらず，この時期の社会科実践については，いまだ不明なことが多い[3]。

そこで本稿では，文部省教科書局（以下，教科書局）が指定した1948年度文部省教科書局実験学校（以下，1948年実験学校）で行われた社会科カリキュラム研究に着目する。教科書局では，1946年度以来，師範学校の附属小学校の数校を実験学校に指定して新教育の研究に取り組んできた[4]。1946年度は，公民教育の研究，1947年度は，各教科の研究を推進している。教科書局は，これを踏まえ，1948年4月には20校を指定[5]し，1年間かけて「カリキュラム構成」の問題についての研究を推進した。この研究成果は，1949年6月6～8日に東京高等師範附属小学校（以下，東京高師附小）で開催された「文部省実験学校研究発表会」[6]（以下，発表会）で報告されている。発表会では，「カリキュラムの構成」という研究課題のもと，生活カリキュラム，国語科カリキュラム，社会科カリキュラム，理科カリキュラム等，それぞれの担当教科の研究に取り組んだ学校が研究成果を報告している。したがって，この発表会の動向に着目することは，1948年前後の文部省による社会科カリキュラム研究の動向を捉えることにつながると考えられる。

1948年実験学校の取り組みは，カリキュラム研究をはじめ，各教科の教育史研究で，学校ごとの分析が行われてきた[7]。その中で，発表会は，東京高師附小のカリキュラム研究を分析した林の研究で触れられている[8]。しかし，林の研究では，当時，全国の学校で行われたカリキュラム研究における東京高師附小の位置を示すために，発表会に参加した一部の学校の発表題目に触れているのみである。よって，これまでの研究では，1948年実験学校指定の目的と社会科研究の実態についての分析は行われてこなかったと言える。

*信州大学

以上を踏まえ，本稿では，次の手続きをとる。まず，教科書局による1948年実験学校指定の目的と社会科研究の内容について，各校による発表会での報告内容の分析を通して明らかにする。次に，社会科担当校が作成した社会科カリキュラムの特色について，「カリキュラム構成の立場」「カリキュラム構成の基盤」「カリキュラム構成の実際」の3点から明らかにする。さらに，それを踏まえて，1948年実験学校の社会科カリキュラム研究の傾向について，社会科担当校の研究動向との関係から考察することで明らかにする。その上で，1948年前後の文部省による成立期社会科の実施過程の一端について言及したい。

2.「文部省実験学校研究発表会」における社会科研究の位置

(1) 1948年度指定実験学校の指定の背景と研究動向

1949年6月6～8日に東京高師附小で開催された発表会の日程は，表1の通りである。表1から，1948年度の実験学校指定について，次のことが確認できる。

1つ目は，参加校の多様性である。表1によれば，東京高師附小・中学校，奈良女子高等師範附属小学校・中学校，東京第三師範附属小学校・中学校，千葉師範男子部附属小学校・中学校，千葉師範女子部附属小学校・中学校，神奈川師範男子部附属小学校・中学校，神奈川師範女子部附属小学校・中学校，長野師範女子部附属小学校・中学校，長野県温明小学校・中学校，東京第一師範男子部附属小学校が研究成果を報告している。これに対し，1947年度は，長野師範男子部附属小学校，東京第二師範男子部附属小学校，東京第二師範女子部附属小学校，千葉師範男子部附属小学校，千葉師範女子部附属小学校，栃木師範男子部附属小学校，栃木師範女子部附属小学校の7校であった。つまり，1947年度は，師範学校の附属小学校に限定された指定であった。しかし，1948年度は，高等師範学校の附属小・中学校，師範学校の附属小・中学校，さらには，公立の小・中学校が指定されている。

この背景には，1948年3月に改訂された「教科書局実験学校設置要項」が影響を与えていると考えられる。「教科書局実験学校設置要項」の第四項に次の記述がある[9]。

> 実験学校は，小学校および中学校についてこれを指定し，原則として，高等師範学校，師範学校の附属小学校，中学校を指定するものとする。必要のあるときは，その他の小学校，中学校を指定することができる。

また，小学校と中学校を同時に指定した背景には，小学校と中学校の9年間を一本化したカリキュラムの作成を行おうとする意図がみられる。例えば，家庭科教育の研究を担当した長野師範女子部附属小学校と中学校では，家庭科の研究課題の1つとして，「小学校・中学校一体としてカリキュラム構成をはかること」[10]としている。ゆえに，神奈川師範男子部附属小学校と中学校，神奈川師範女子部附属小学校と中学校，温明小学校と中学校のように小学校と中学校が共同で行った研究成果を報告している学校がみられるのである。

2つ目は，大規模なカリキュラム研究が行われていることである。先述のように，1948年実験学校の研究は，「カリキュラム構成の問題」という課題で行われた。そのため，分科会では，生活カリキュラム，理科カリキュラム，社会科カリキュラム，音楽科カリキュラム，家庭科カリキュラム，職業科カリキュラム，国語科カリキュラム，算数数学カリキュラム，図画・工作科カリキュラム等のカリキュラムに関わるテーマが討議されている。

こうした状況について，当時の教材研究課長の青木誠四郎は次のように述べている[11]。

> 新しいカリキュラムの発展には，その基礎となる心理学的な究明が控えているのである。ことに児童の生活や，学習の心理学的研究が，その根本に具わっているのである。それを究めることなくして，あるいはそれに一顧も与えないで，形式だけを真似ても，決してほんとうの理解も生まれなけ

表１　文部省実験学校研究発表会（1949年６月６～８日）の日程

第一日	9,00—9,10	挨拶		
	9,10—12,00	研究発表	コーア・カリキュラムと取りくんできた一年—本校コーア・カリキュラムの批判と改造—	東京高師附属小学校
			奈良プランの実践	奈良女高師附属小学校
			本校の生活カリキュラム	東京第三師範附属小学校
			中学校単元構成の方法	東京高等師範附属中学校
	12,00—1,00	昼食　休憩		
	1,00—3,00	研究発表	理科カリキュラムの構成	神奈川師範男子附属小中学校
			理科カリキュラムの構成と実態調査	長野師範女子部附属小学校
			理科学習単元の構成	長野師範女子部附属小学校
	3,00—4,00	講演	「新教育の展開」	東京家政大学々長　前文部省教材研究課長　青木誠四郎氏
	4,00—5,00	討議	第一分科会　生活カリキュラム	
			第二分科会　理科カリキュラム	
			第三分科会　中学校の新しい教育課程	
			第四分科会　特別教育活動，ホームルーム	
			第五分科会　社会調査	
			第六分科会　学級編成	
			第七分科会　健康教育	
第二日	9,00—12,00	研究発表	家庭科カリキュラム構成の手順と指導の実際	長野師範女子部附属小中学校
			家庭科学習指導の実際—興味ある教材と興味の少ない教材の取扱い—	奈良女高師附属中学校
			農村における職業科カリキュラム	長野県温明中学校
			都市における職業科の単元構成	東京高師附属中学校
			音楽科学習単元の設定	東京高師附属中学校
			生活学習における音楽	千葉師範女子部附属小学校
	12,00—1,00	昼食　休憩		
	1,00—3,00	研究発表	社会科カリキュラム構成の手続き	神奈川師範女子部附属小中学校
			社会科単元学習の実践	千葉師範女子部附属小学校
			農村における社会科カリキュラムの構成ー実態調査と単元の構成ー	長野県温明小中学校
	3,00—4,00	講演	アメリカにおけるカリキュラムの研究	C・I・E教育顧問　M・L・オズボン氏
	4,00—5,00	討議	第一分科会　社会科カリキュラム	
			第二分科会　音楽科カリキュラム	
			第三分科会　家庭科カリキュラム	
			第四分科会　職業科カリキュラム	
			第五分科会　実態調査	
			第六分科会　学籍簿	
			第七分科会　性格教育	
第三日	9,00—12,00	研究発表	国語科カリキュラムの構成	神奈川師範女子部附属小中学校
			国語科単元学習の実践とその反省	奈良女高師附属中学校
			国語科のカリキュラム—コーア・カリキュラムをめざして—	東京第三師範附属中学校
			数学科単元の構成	東京第三師範附属中学校
			算数科カリキュラムの実践とその記録	千葉男子附属小学校
	12,00—1,00	昼食　休憩		
	1,00—3,00	研究発表	生活カリキュラムと図画・工作	東京第三師範附属小学校
			図画・工作カリキュラム構成と指導内容の研究	神奈川師範男子部附属小学校
			わが校の学校図書館	東京第一師範男子部附属小学校
			わが校学校図書館運用の実際	同
	3,00—4,00	講演		文部大臣　高瀬荘太郎
	4,00—5,00	討議	第一分科会　国語科カリキュラム	
			第二分科会　算数数学カリキュラム	
			第三分科会　図画・工作科カリキュラム	
			第四分科会　学校図書館	
			第五分科会　学習指導要領	
			第六分科会　教育評価	
			第七分科会　視覚・聴覚教育	

（文部省教科書局実験学校連盟『文部省実験学校研究発表会 要項』（1949）１－５頁より筆者作成）

れば，それを身につけることもできないのである。たゞ新しいからといつて，その基礎を求めることなしに，これにとびついていくというのは熱病の微候だといわなくてはならない。

当時，学習指導要領の「試案」としての性格を受けて，「カリキュラムはこれを自主的に編成しなければならないものであることが，広く教育界に啓蒙された」[12]。そのため，学校現場では，慣れないカリキュラム研究を行うための手がかりとして，アメリカのカリキュラム論やガイダンスが注目された。特に，「コーア・カリキュラムが流行して，これを口にしないと一人前ではないような気がしているとか，あるアメリカの人が，あまりコーア・カリキュラムについてしつこくきくので，コーアは林檎の心と同じで，食えないから棄てるところだと答えたとか，コーアは，中等学校のカリキュラムだと答えたら，その日本の教師が，日本のコーアは小学校のカリキュラムですといつたとか，表面的な，研究不足を示し，流行を語るようないく多の挿話がきかれる」[13] と言われ，コア・カリキュラムの流行現象がおきていた。こうした状況への対応のための研究を推進することに，実験学校指定の1つのねらいがあった。

以上から，1948年実験学校の指定は，1947年度と異なり，師範学校の附属小学校から高等師範学校の附属小・中学校や公立の小・中学校までを含むものに拡大し，小学校と中学校の一貫性や教科の枠を越えた大規模なカリキュラム研究の推進を目指したところに特色があった。

(2) 社会科担当校による社会科研究の状況

1948年実験学校の中で，社会科に特化して研究に取り組んだのは，神奈川師範女子部附属小学校・同中学校（以下，神奈川女子附小中），千葉師範女子部附属小学校（以下，千葉女子附小），長野県三郷村立温明小学校・同中学校（以下，温明小中）である。これらの学校は，発表会において，「社会科カリキュラム構成の手続き」（神奈川女子附小中），「社会科単元学習の実践」（千葉女子附小），「農村における社会科カリキュラムの構成―実態調査と単元の構成―」（温明小中）という題目で報告している（**表1**）。

それぞれの学校の報告内容をまとめたのが，**表2**である。**表2**の「発表内容の構成」に着目すると，各校ともに，「カリキュラム構成の立場」「カリキュラム構成の基盤」「カリキュラム構成の実際」に関わる点を中心に報告していることが確認できる。

「カリキュラム構成の立場」については，各校が次のことを主張している。神奈川女子附小中は，「地域社会の特質と，児童，生徒の生活経験の特徴とに立脚して，学習指導要領に掲げられた社会科の目標を達成する」[14] ことを目的としている。そのため，「1. 本校教育の一般目標」「2. セパレート・コース」「3. 地域社会科」の3点を強調している。千葉女子附小は，「教師」「P.T.A」「児童」の3者の関係からのカリキュラム構成を重視している。「教師」は，研究，指導技術，「P.T.A」は，協力体制，「児童」は，計画に参加，責任ある活動，を行うものとしている。温明小中は，「1. 学校の主体性」「2. 実験学校としての立場」「3. 社会科カリキュラムの位置」「4. 他教科との連絡」「5. 地域性の重視」の5つである。「1. 学校の主体性」は，「小中学校協同し一体となって地域社会と子供に適応する九年一貫した社会科カリキュラムの系統案を作成する」[15] こと，「2. 実験学校としての立場」は，「文部省当局の援助を仰ぎ成果をあげるように努める」こと，「3. 社会科カリキュラムの位置」は，「一般社会科（広領域カリキュラム）の立場をとり漸進的にコーア・カリキュラムに進む」[16]，「4. 他教科との連絡」として「社会科は社会人の育成を中心目標とし家庭科職業科等の根幹であり，分科する前の一般的基礎を培う。歴史科理科等と内容的連関をはかる」[17]，「5. 地域性の重視」として「コミュニティ・スクールの地方教育案として立てる。文化農村の建設を目指した農村カリキュラムの構成を企図する」とする[18]。

表２　社会科担当校による報告内容

学校名	発表題目	発表内容の構成
神奈川師範女子部附属小中学校	社会科カリキュラム構成の手続き	一，カリキュラム構成の立場　1本校教育の一般目標　2セパレート・コース　3地域社会科 二，カリキュラム構成の基盤　1社会調査　2生活調査 三，カリキュラム構成の実際　1本校の社会科教育の目標　2学習の範囲　3学習の配列　4各学年の具体的目標　5学習課題と単元　6単元計画
千葉師範女子部附属小学校	社会科単元学習の実践	一，はじめに　1本校の現状は　2こんな計画で 二，こんな夢を　教師○研究○指導技術　P.T.A.○協力体制　児童○計画に参加○責任ある活動 三，こんな進め方を　1単元計画の吟味　2作業単元の構成 (1) ○家庭の声○児童の声○学級の組織活動の整備 (2) 単元をとりあげるまで○学級のあらわれ○環境の設定○現場との直結　3学習指導計画の作成 (1) 教師の計画 (2) 児童の計画　4学習の展開　5評価 (1) 児童の声 (2) 家庭の声 (3) 教師の評価　6カリキュラムの補正 四，ふだんが大事　1学級のめあてと活動　2記録と評価 (1) 教師の記録 (2) 教師と児童との記録 (3) 児童の相互評価記録（星取表）(4) 児童の自己評価記録 (5) 教師の指導箋（当日の指導と評価）(6) 家庭並に現場との連絡 3学流の展開と子どもの自治活動　4保存と整理 (1) 保存箱　(2) 整理箱 五，おわりに1子どもの動き 2P.T.A. の活動　3カリキュラム再構成
長野県温明小・中学校	農村における社会科カリキュラムの構成―実態調査と単元の構成―	一，本校の立場　1学校の主体性　2実験学校としての立場　3社会科カリキュラムの位置　4他教科との連絡　5地域性の重視 二，基礎的研究　1社会の研究　2児童生徒の研究　3その他の調査 三，カリキュラム構成の過程　1教育目標の設定　2単元の構成　3年次計画

（文部省教科書局実験学校連盟『文部省実験学校研究発表会 要項』(1949) 57 － 78 頁より筆者作成）

「カリキュラム構成の基盤」については，基礎調査を重視していることである。神奈川女子附小中は，「社会調査」「生活調査」，千葉女子附小は，「家庭の声」「児童の声」，温明小中は，「社会の研究」「児童生徒の研究」「その他の調査」の成果に基づいて教科課程を編成しようとする。

「カリキュラム構成の実際」については，次のことを重視している。神奈川女子附小中は，「本校の社会科教育の目標」「学習の範囲」「学習の配列」「各学年の具体的目標」「学習課題と単元」「単元計画」，千葉女子附小は，「単元計画の吟味」「作業単元の構成」「学習指導計画の作成」「学習の展開」「評価」「カリキュラムの補正」，温明小中は，「教育目標の決定」「単元の構成」「年次計画」を奨励している。

以上を踏まえると，社会科担当校の動向として，次の共通点と相違点が浮かびあがる。共通点としては，カリキュラム構成における基礎調査と地域性の２つを重視する姿勢がみられることである。相違点としては，社会科を一教科として扱うか，コア・カリキュラムのコアとして扱うかという２つの傾向があることである。前者は，「セパレートのコース」として社会科を位置付けている神奈川女子附小中，後者は，生活カリキュラムとしてカリキュラムを構成している千葉女子附小と温明小中である。神奈川女子附小中は，表１の「国語科カリキュラムの構成」の報告の中で，カリキュラムの全体構造について，「生活領域，経験領域を中心としたコーア・カリキュラムを常に考慮しながら現段階に於て指導の効果をあげる為にセパレートのコースを取った」[19] としている。千葉女子附小は，表１の「生活学習における音楽」で，「生活学習」と述べているように，教育の全体計画を生活学習としている。また，先述のように温明小中は，広領域カリキュラムの立場から漸進的にコーア・カリキュラムを目指している。

次に，社会科担当校の中から，神奈川女子附

小中と千葉女子附小を取り上げ，上述の「カリキュラム構成の立場」，「カリキュラム構成の基盤」，「カリキュラム構成の実際」の3点の具体化に着目し，社会科カリキュラムの特色を明らかにしたい。

3．社会科担当校が作成した社会科カリキュラム

(1) カリキュラム構成の立場

神奈川女子附小中は，発表会前の1949年2月に『文部省実験学校研究報告 国語科社会科カリキュラムの構成』，千葉女子附小は，発表会後の1949年11月に『研究紀要第二集 本校における教育課程の研究』を発行している。つまり，神奈川女子附小中は，発表会の原案，千葉女子附小は，発表会の成果を踏まえて，研究紀要をまとめたことが推測される。

それぞれの研究紀要に見られる「カリキュラム構成の立場」の特色は，発表会での報告内容と同様であり，特に，神奈川女子附小中が，「セパレート・コース」，千葉女子附小が，生活カリキュラムとしての立場を重視したカリキュラム構成を考えている。

神奈川女子附小中は，「教科を中心とした現行のカリキュラム」である「セパレート・コース」を採用した背景について，次のように述べている[20]。

> コーアカリキュラム等を決して否定するものではなく，かえってこれを尊重するが故に，一部の学校の研究を検討し反省もしたわけで，将来にそうした方法をめざしつゝ，現段階に於ては，各種の実情を考えて現行カリキュラムの徹底的研究が先行すべきであると意見の一致を見たのである。只こゝに一言したいことは，セパレートのコースを取っても，従来の教科カリキュラムの如く，社会から遊離したものではなく，児童，生徒の日常生活に即する経験カリキュラムの立場をたとうとするものである。

神奈川女子附小中は，「現段階に於ては，各種の実情を考えて現行カリキュラムの徹底的研究が先行すべき」とし，コア・カリキュラムを否定するのではなく，将来のことを考えて，現在のカリキュラムを徹底的に研究することを考えていた。また，従来の「社会から遊離した」教科カリキュラムではなく，「児童，生徒の日常生活に即する経験カリキュラムの立場」から「セパレート・コース」を採用している。

対して，生活カリキュラムの立場に立つ千葉女子附小は，新教育における総合性の重要性に着目し，次のように述べている[21]。

> 新しい教育の方向はこれまでのような分化された知識を知識として集積することではなくて，社会生活の場において，りっぱに責任をもってやりとおす実践力のある社会人でなくてはならない。このような人間を育成するにはどのような理解や態度や能力が必要かがはっきりされなくてはならない。しかもこうした条件がどのような教育の内容と方法とによって習得されるかが最も重要な事項である。私達はこうした考えからこども達の具体的な生活の中から，教育的に価値のあるいくつかの生活課題を発見してそこにあるまとまりのある学習単元を考えそれを中心に出来るだけ総合的に学習が行われるように計画し，その統一性をもった学習内容を多くのこどもが協同して学ぶように計画した。又一方個々の能力が充実されてはその成果を期待できないという立場から基礎として力をねる社会科以外の全教科の指導体系をつくり十分にその力をねる課程を考えている。つまり教科別による基礎力をねりつつ生活学習をめざし更に総合的な生活力を養おうという考え方なのである。分科をもった総合であり総合性のある分科であることを強調していきたいのである。

千葉女子附小は，「社会生活の場において，りっぱに責任をもってやりとおす実践力のある社会人」を育てるために，総合性を重視しているのである。また，「教科別による基礎力をねりつつ生活学習をめざし更に総合的な生活力を養」

うことを重視している。

(2) カリキュラム構成の基盤

続いて，「カリキュラム構成の基盤」については，2校ともに実態調査を重視している。

神奈川女子附小中は，「社会調査」と「児童の生活調査」を重視した。「社会調査」では，横浜市全体の「(イ) 生活地盤の調査（自然，社会，歴史構成)」「(ロ) 生活領域の調査（生産，消費，運輸通信，保護保全，厚生慰安，政治統制，教育)」を行った[22]。「児童の生活調査」では，「(一) 生活環境の調査—家庭環境調査，学校環境調査，社会環境調査」「(二) 生活内容の調査—遊びの調査，勤労の調査，読書の調査，ラジオ聴取の調査，生活領域の調査，新聞の調査，話題の調査，一日の生活調査，健康の調査，経済の調査，通信の調査，交友の調査，自治的な生活の調査」「(三) 能力の発達調査—知能検査，興味の調査，疑問の調査，歴史的・地理的意識の調査，道徳的判断の調査，社会科学習活動調査」「(四) 態度の調査—諸社会事象（政治，経済，習慣，風俗，思想）に対する態度についての調査」を行った。これらの成果は，カリキュラム構成において，教材選択の基準となる「社会機能」と教材配列の基準となる「学年の主題」を抽出する重要な材料となった。「社会機能」としては，「(一) 生命資源の保護保全」「(二) 生産，分配，消費」「(三) 交通，通信，運輸」「(四) 交際」「(五) 厚生慰安」「(六) 美的及び宗教的欲求の表現」「(七) 教育」「(八) 政治（統制)」の8項目を選定した。「学年の主題」としては，「家庭学校を中心とする社会生活」(第1学年)，「近隣の人々の社会生活」(第2学年)，「郷土の社会生活」(第3学年)，「郷土を中心とした現代日本の社会の発達」(第4学年)，「発明と発見によって変化し，改革された現代社会」(第5学年)，「機械生活の社会生活に及ぼす影響」(第6学年)，「共同生活のための諸社会施設」(中学1年)，「発明発見が人間の基本的欲求に及ぼす影響」(中学2年)，「民主主義の人間生活に及ぼす影響」(中学3年) を選定した。当時，社会科研究の中心であった山崎巳代治は，「社会科の学習指導を進めるに当って，児童の生活と，それを包含する現実社会の実態とを確実に把握することの必要は，ここに説明するまでもない」[23] とし，上記の「社会調査」と「児童の生活調査」の重要性を指摘している。

対して，千葉女子附小は，「社会調査」「文献調査」「児童調査」を重視した。「社会調査」では，世論調査，職域調査，実態調査，「文献調査」は，現行教科書の分析，学習指導要領の吟味，各種文献の調査，さらに「児童調査」は，生活調査，関心調査，社会意識の調査，能力調査，学習形態の調査を検討している。これらを踏まえ，『小学校社会科学習指導要領補説』(以下，『補説』) との関連を踏まえ，「社会機能」(「生命資源の保護保全」「生産・分配・消費」「運輸・通信・交通」「美的及宗教的欲求の表現」「教育」「厚生慰安」「政治」) を抽出するとともに，表3の「学年の発展的序列」を作成した。

こうした背景には，千葉女子附小は，1946年4月の移転の際に，学区をもつ附属学校として新たに出発したという特徴がある[24]。そのため，「本校は学区をもつ附属校として地域社会に根を下ろしているのであるからその実態をつかみ，児童のもつ興味や感心(ママ)等を知り教育の目標にてらして本校に即した教育課程を考えなくてはならない」[25] と述べるように，地域と児童の実態の把握が重視されたと考えられる。

(3) カリキュラム構成の実際

では，以上の「カリキュラム構成の立場」と「カリキュラム構成の基盤」を踏まえて構成されたカリキュラムはいかなるものであったか。次に，①社会科教育の目標，②単元構成，③単元の展開，の3点に着目して，「カリキュラム構成の実際」を明らかにしたい。

①社会科教育の目標

神奈川女子附小中は，社会科の目標について次のように述べる[26]。

新しい教育の基本的課題である民主的社

表３　千葉女子附小における学年の発展的序列

1年	2年	3年	4年	5年	6年
家庭学校近所の生活	家庭学校近所の生活	四街道の生活～下志津原をとりまく地方	下志津原をとりまく生活～県まで及ぶ	千葉県をとりまく地方の生活	我国の生活と諸外国
自然現象社会現象の未分化	自然現象社会現象の未分化	自然環境と人間の相互の反応が興味の中心	自然環境と人間の相互の反応が興味の中心 私たちの生活がどのようにして生まれてきたか	発明発見がどのように生活を変化させたか 発明発見機械力の人間に及ぼす影響	発明発見がどのように生活を変化させたか 発明発見機械力の人間に及ぼす影響
歴史意識	歴史意識	歴史意識 はっきりしないが全く文明の開けない不自由の時代の人々の生活に興味をもつようになってくる	歴史意識 ようやく芽生ばえてきたが時代の概念はまだ分化せず過去の時代はすべて現在と対比させる昔として一概に考えられる程度である	歴史意識	歴史意識
社会意識の拡大 自己中心的であって身近かな社会をかれらに直接関係ある限り行動を通じて理解する	社会意識の拡大 近所の社会での人々の協力や種々な職業や公共施設である程度まで理解できる	社会意識の拡大	社会意識の拡大	社会意識の拡大	社会意識の拡大
身近社会	身近社会 郷土社会		地区社会	国家社会	国際社会

（千葉大学千葉師範学校第二附属小学校『研究紀要第二集 本校における教育課程の研究』（1949）28頁より筆者作成）

表４　神奈川女子附小の社会科教育の目標

	理　解	態　度	能　力
本校社会科教育の目標	1．各種の社会（家庭・学校・種々の団体）及び構成員の間の相互依存の理解。	1．共同社会の進歩に貢献する態度。	1．自分の考えを立て，それを実行する能力。
	2．社会生活上の諸問題に対して宣伝の意味を理解。	2．礼儀正しい社会人としての態度。	2．共同の福祉を増進する関心と能力。
	3．生産，消費，交通，運輸等の自然的，社会的条件の理解。	3．社会生活の自称を科学的・合理的に判断する態度。	3．自然，及び社会についての科学的に観察する能力。
	4．自然的環境と，そこに営まれる文化は各地で異なることの理解。	4．自己の責任と地位を重んずる態度。	4．資源を開発し，人工美を創造する能力。
	5．各地域，各階戸，各職域の人々の生活の特質の理解。	5．社会の秩序，法を重んずる態度。	5．将来を見わたす能力。
	6．各地の資源，自然美，及び人工美の価値を理解。	6．国内融和，国際親善，に貢献しようとする態度。	6．職業を選択する能力。
	7．社会生活が常に発展するものであることの理解。	7．各地の資源，自然美，人工美を愛護しようとする態度。	7．勤労によって，産業の発展に寄与する能力。
	8．過去の事績を背景として現代の特質を理解。	8．他人の職業を尊ぶ態度。	8．資料を集めたり，記録，地図，写真，統計等を利用し，またこれを作製する能力。
	9．各種の職業の社会的意義の理解。	9．勤労を尊ぶ態度。	9．人と話合いをする能力。
	10．勤労の価値の理解。	10．自己の健康及び社会一般の衛生に留意し，それを工場させる習慣と態度。	
	11．健康，保全についての理解。	11．人に会って知識を得る習慣。	
	12．娯楽や運動についての理解。	12．自主，正義，公正，寛容，友愛の態度。	
	13．学校とその他の教養施設についての理解。		
	14．宗教の社会生活における意義の理解。		

（神奈川師範学校女子部附属小中学校『国語科社会科カリキュラムの構成』（1949）86，87頁より筆者作成）

表５　千葉女子附小の社会科教育の目標

生命資源の保護保全	○自分から進んで身体をきたえ，健康を保つに必要な知識，態度、能力を養う。
	○公衆衛生の大切なわけを理解し，これに必要な能力を養う。
	○社会における保険衛生に関係ある諸施設を理解する。
	○社会生活には秩序が大切であり，それに対応する態度と能力を養う。
	○防犯，防火等に心がけ，これに体する適切な対処を取り得るよう態度と能力を養う。
	◎スポーツの意義を理解し，これをたのしみ，生活を豊かに健康を保つ能力を養う。
	○交通上の規則や事故防止についての能力を養う。
	○天災地変に対して，必要な知識，態度，能力を養う。
生産分配・消費	◎経済生活の現状を理解し，合理的な生活と貯蓄に対する正しい態度を養う。
	○消費生活を合理的にし，実践する態度と能力を養う。
	○納税の意義を理解し，これに協力する態度を培う。
	○金銭や物品を正しく使う態度と能力を養う。
	○統制経済の意義を理解し，社会の秩序を維持する能力を養う。
	○勤労の意義を理解し，増産に協力する態度と能力を養う。
	○発明や発見，機械の生産は生産を飛躍的に工場させていることを理解する。
	◎人間は各々の職業を通じて社会に奉仕していることを理解する。
	○生産，分配，消費の機能を果す社会の施設を理解する。
交通・運輸・通信	○交通、運輸，通信の方法と社会における重要性を理解する。
	○交通，運輸，通信の歴史的な発達の過程を知り，将来の改善と能率を増す能力を養う。
	○道路の果す使命を理解し，愛護に協力する態度と能力を養う。
	○交通の秩序と道徳を理解し，その維持に協力する態度を養う。
	○交通，運輸，通信の機能を果す社会の施設を理解する。
美的宗教的要求の表現	◎真実に対する撞提の念を養い、宗教的情操の素地を養う。
	○文学，音楽，造形等に対する理解を深めて，鑑賞力をねり，創造的表現力を養う。
	○生活を美化，文化を向上させる能力を養う。
	○芸術的な感覚を日常生活から発見し，その異を通じて表現する能力を養う。
教育	○教育の重要なわけを理解する。
	○新聞，雑誌，図書等が教養を高める上で重要であることを理解する。
	○教育の機能を果す社会の施設を理解する。
厚生慰安	○私たちの生活には慰安，娯楽が必要であることを理解する。
	○映画，ラジオ，音楽等に対する鋭い鑑賞力，批判力を培う。
	○娯楽場における社会道徳の昂揚をはかる。
	○余暇を善用し，人格を高める一助をする習慣と態度を養う。
	○娯楽施設を理解し，その機能を果すために必要な社会施設を活用する態度を養う。
政治	◎住みよい四街道建設に必要な知識能力を養う。
	○選挙の意義を理解し，各種機会の機能を理解する。
	○民主政治の意義を理解して，自主的に参加し，責任を果し，民主的に会議を運ぶ態度を養う。
	○他の人格を尊重し，協同して事に当る態度，能力を養う。
	○寛容，平等，友愛の精神を以って，他と交わる態度を養い，国際協調の精神を身につける。
	○外来者に対して礼儀正しくふるまう態度を身につける。

（千葉大学千葉師範学校第二附属小学校『研究紀要第二集 本校における教育課程の研究』（1949）15，16頁より筆者作成）

会の建設にふさわしい人間の形成を基調とし，そのために必要な理解，態度，技能を得させることを根本としたものであるが，その具体的，直接的な手続きとしては，地域社会の課題を大胆にとりあげ，これを解決しようとする児童，生徒の努力を通して，深く地域社会を理解させると共に，更に日本及び世界を会得させようとするものに外ならないのである。

そして，この考えに，「(一) 新しい学校教育

の目標（新憲法，教育基本法，学校教育法，新教育指針，学習指導要領一般編）」「（二）社会科の一般目標（学習指導要領社会編）」「（三）本校教育の一般目標」「（四）社会調査（地域社会の実態とその課題）」「（五）児童の生活調査（児童の生活実態）」を考え合わせて表４の目標を設定している。

対して，千葉女子附小は，「教育目標（憲法以下）」と「地域の課題」「児童の実態」を踏まえて，「本校の教育目標」を立て，そこから表５の「社会科の目標」を立てている。

②単元構成

神奈川女子附小中の単元一覧を表したのが表６，千葉女子附小の単元一覧を表したのが，表７である。２つを比較すると次のような特徴がみられる。

表６　神奈川女子附小中の単元一覧

社会機能＼学年		1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
		家庭・学校を中心とする社会生活	近隣の人々の社会生活	郷土の社会生活	郷土を中心とした現代日本の社会の発達	発明発見によって変化し,改革された現代社会	機械生産の社会生活に及ぼす影響	共同生活のための社会建設	発明発見が人間の基本的欲求に及ぼす影響	民主主義の人間生活に及ぼす影響
生命資源の保護・保全	4	たのしい学校	学用品しらべ	学級文庫	生活の工夫	地方自治	憲法	教育制度	世界の農牧生産	横浜市の文化問題
	5									
生産 分配 消費	6	たのしいお家	郵便ごっこ	いろいろな乗物	横浜の今と昔	保健	市民の食生活	家庭生活	近代産業と交通通信	横浜市の社会対策
	7									
交通 通信 運輸	8									
	9	丈夫なからだ	私たちのからだ	仲良しクラブ	横浜の交通	貿易	読書と映画	余暇の善用	思想文化と交流	統制経済
交際	10									
厚生 慰安	11	店やごっこ	配給ごっこ	水と電気	危険の防止	新聞とラジオ	工場生活	横浜の行政	議会政治	労働問題
	12									
美的及び宗教的欲求の表現	1	お客様ごっこ	楽しい生活	市場	学級新聞	交際	国際親善	日本の貿易政策	生余資源の保護保全	政治問題
教育										
政治（統制）	2	電車ごっこ								
	3									

（神奈川師範学校女子部附属小中学校『国語科社会科カリキュラムの構成』（1949）112，113頁より筆者作成）

表７　千葉女子附小の単元一覧

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	うれしい一年生	私のうち		水あそび		丈夫なからだ	ままごとあそび		お正月		なかよし会	
2年	学級のお友達	私たちのからだ			のりものごっこ		お百姓さん	ゆうびんごっこ		買物ごっこ		たのしい読書会
3年	私達の学級自治会	生きもののせわ			四街道と和良比		お店しらべ			のりものしらべ		たのしいあそび
4年	たのしい学級	生きものと私達の生活	つゆと私達の生活		四街道の発達			房総めぐり		つくばおろしと私達の生活		
5年	学級の自治	保健衛生			読書と私達の生活		都市と農村		交易と私たちの生活	地方自治と私達	郷土の生活と私達	
6年	学級自治と私達の生活		工場と私達の生活		報道と私達の生活		交易と私達の生活		我国と関係の深い国々		住みよい郷土	修学旅行

（千葉大学千葉師範学校第二附属小学校『研究紀要第二集 本校における教育課程の研究』（1949）29，30頁より筆者作成）

1つ目は，千葉女子附小は，社会科の内容をこえた単元が確認できることである。「水あそび」(1年)「たのしい読書会」(2年)「生きものの世話」(3年）や「修学旅行」(6年）などがそれにあたる。

2つ目は，どちらも地域の内容を重視していることである。神奈川女子附小中は，「横浜の今と昔」(4年)「横浜の交通」(同)「横浜の行政」(7年)，千葉女子附小は，「房総めぐり」(4年)「四街道の発達」(同）のような地域に密着した単元がある。

③単元の展開

次に，単元の展開を検討する。神奈川女子附小中の単元「横浜の交通」(4年）の展開が表8，千葉女子附小の単元「四街道の発達」(4年）の展開が表9である。この2つを比較すると，次の2つの特徴を読み取ることができる。

1つ目は，表9の千葉女子附小の単元「四街道の発達」には，他教科との関連が見られることである。例えば，国語科で「郷土の歴史」の紙芝居を作成したり，算数での「人口しらべ」などは，「四街道の発達」を調べる際に密接に関係する内容である。しかし，神奈川女子附小中は，他教科との関連については触れていない。

2つ目は，表9の千葉女子附小には，先述の目標にみられるように，児童の総合的な力を育てることを重視している。この背景には，千葉女子附小の次のような意図がある[27]。

一，社会科をたんねんにやればやるほど他教科の領分が自然のかたちで入り込んできてその限界がはっきりしなくなってくる。しかしのこされるものも多分にあるのでこれを一応整理してみてはどうか。

二，或まとまりをもたせ総合的な生活力をねる機会はどの教科においても熟練すれば可能であろうが本校としては社会科をその中心において「ふくらまし」といった様にして学校としての教育課程を作成してみよう。

三，社会科と他教科との関係は出来るだけ密接に行うが中心と周辺といった従属的な考え方でなしにその取扱う時期を考えて作成してみよう。

四，教科外のすべての活動は生活教育の場として考え実践の好機としたい。

表8　神奈川女子附小中の単元「横浜の交通」(4年）の展開

単元名	横浜の交通		
単元の目標	理解	技能	態度
	・交通機関の種類と用途 ・電車が動くために働く人々の仕事 ・交通を安全にする諸施設 ・乗物の歴史について ・交通道徳について ・横浜の交通と発展との関係について ・地図のよみ方 ・交通機関の利用法 ・市電の利用価値と生活の合理化 ・交通を発展させるために，如何に人々が苦労し，努力したか	・調査の技能 ・メモをする ・作図絵をかく ・模型をつくる ・読図地図のかき方 ・参考書の利用 ・まとめ発表能力 ・係としての能力	・見学訪問時の面接の態度 ・日常利用する交通機関になれる ・働く人々の仕事と，責任の重いことがわかるようになる ・交通道徳を守る ・共同学習になれる ・発明発見の偉大さと，求知心を発展させる ・交通週間への協力
学習活動の大要	○電車	・通学児童について，通学上のいろいろなことについて話し合う。 ・市電について知っていること，知りたいことについて話し合う。 ・市電局訪問の計画をたて，調査見学する。 ・調査してきたこと，研究してきたことについて，グループ毎にまとめる，発表する。	
	○発表を中心とした話し合い ○交通あそびの計画をする ○交通あそびをする。 ○父母を招待して，学習の結果を発表する		

(山崎巳代治「社会科の実態調査の活用」(『学習活動』第2巻第5号，1949) 31頁より筆者作成)

表９　千葉女子附小の単元「四街道の発達」（４年）の展開

単元名	四街道の発達	学習に利用する施設	下志津原，大土手山，鹿島川，配給所，学校，役場，警察，郵便局，農業会，駅，体育館，商店，工場，マーケット，精米所

単元の目標	理解	態度	能力
	・四街道を開いた人々はよりよい生活の道を求めてきたこと ・昔の人々の衣食住の生活は極めて素朴であったこと ・祖先は資源を大切にしてきた ・人々は生活条件によって移動する場合もある ・現在生産と消費は統制がとられている ・町にはいろいろな施設官衙があって住みよい ・四街道の保健に活動している ・年中行事のいわれをしってたのしくふるまう ・困難なときには資源を利用する新しい道が考えられる ・いろいろな職業があり分業が進むほど能率的であること ・社会は相互依存でなりたっている ・祖先は困難とたたかいながら生活を改善してきた	・昔の生活と今の生活と比較して批判する態度 ・祖先の遺業に感謝する態度 ・自然の資源を利用する態度 ・職業に理解をもち天々の職業に感謝する態度 ・郷土のまつりをたのしく有意義にすごす態度 ・町の施設に協力しようとする態度 ・いろいろの規則に従おうとする態度	・地図を作り読む能力 ・昔の生活と今の生活を比較する能力 ・調査し簡単な統計表をつくる能力 ・余暇を利用し厚生慰安の施設を活用する能力

	社会科	国語	算数	理科	音楽	図工	体育
九月	四街道の位置を調べよう ・屋上より四街道を展望する ・四街道の眺望図を書く ・略地図を作成する ・官衛学校部落を符号で記入 ・田畑森の記入 四街道の模型をつくる ・輪郭をきめて ・山川原道をつくる ・お友達の家を入れる 四街道の生い立ちをしらべよう 地名の由来をしらべる ・祖先の移住して来た道すじ ・昔の家と今の家 ・四街道の生い立ちと軍隊の歴史 郷土四街道の現状をしらべる ・人口しらべ ・職業しらべ（種類と割合，分布図） 配給所を見る ・はたらく人々と仕事 ・配給品の種類と性格 ・配給の方法 官衛学校しらべをする ・役場，警察，郵便局，農業会，学校 病院しらべをする 娯楽施設をしらべる ・映画館，体育館	発表会 夏休み中の作品をまとめて発表する 作文月見 幸福 文の要点をつかんで発表する 飼育文 ・うちのほおじろ ・感想をまとめる 研究文 ・貝づか ・話のすじをつかむ ・絵ばなしにしてみる 郷土の伝説をかく 紙芝居 ・「郷土の歴史」をつくる	地図つくり ・北東北西 ・南東南西 お友達の家しらべ ・簡単な案内図 ・直径，半径，距離をkmであらわす 人口しらべ ・概数を用いて数をよんだり書いたりする ・和の意味をまとめる 計算練習 ・被加数と加数が共に四位数 ・和が10000以下の場合 （繰上り1,2,3回におよぶ） お店ごっこ ・三つ以上の数を加える場合にその順序をかえてもよい ・被加数，加数がともに四位数 ・和が10000以下繰上る場合 （1,2,3回におよぶ） ・乗法と加法あるいは乗法と減法とを組合わせた二股階の問題 ・乗法除法による二段階の問題	いねの一生 1. いねのほはいつごろでるか 2. いねの花の観察 3. いねの害虫と病気 4. いねとひえはどうちがっているか 秋の野山 1. 夜間のあかりにくる虫を集める 2. 秋鳴く虫にはどんなものがいるか 3. 秋さく花 4. 草や木の実のり方 5. 秋紅葉するもの 6. きのことり ・食用きのこ ・毒きのこ ・きのこのふえ方 小鳥の生活 1. 渡り鳥 2. 留鳥 3. 野山の鳥のたべものはどんなものか 4. どうしたら野鳥はふやせるか 月 1. 明月をみる 2. 月の表面はどうなっているか 3. 月はどんな運動をするか 4. 月のみちかけはどうしておきるか いねの一生（3） 1. いねはどのように実をつけたか 2. いねのとり入れ実のつき方 3. 稲をかりとって俵になるまで	村のかじや ・合奏美 ・たのしいリズム遊び ・鑑賞 きたえる曲 ・鑑賞曲 ・音程のとり方 ・歌唱　鑑賞 メヌエット ・鑑賞曲 ・ハテレウスキー ・ピアノ鑑賞曲	四街道の眺望図 眺望図のかき方の理解 設計図(町模型) 中心になるものの位置のおさえ方 家づくり ・展開図のかき方 ・立体構成に対する理解 ・のりのつけ方 ・小刀やはさみの使い方 秋のくだもの （写生画） ・構図のとり方 ・光線に対する工夫 ・明暗 ・ハイライトの指導 秋のたんぼ （写生画） ・安定した構図 ・豊かな色彩感覚 生活の変遷の絵巻物 ・統一にある思想の表現 ・関係ある画面の連絡	運動時の姿勢 ・運動と損害 ・鬼あそび ・けん鬼 リレー ・円形リレー 機械あそび ・逆上り ・前まわり ボール遊び ・ドッチボール ・送球競走

十月	昔の四街道の様子を絵にかいてみよう ・佐倉城跡付近に遠足する ・大昔の人の生活の本をよんだり話をきく ・絵巻物をつくる 下志津原の開墾はどれくらいすすんでいるかをしらべる ・大土手山からの展望 ・開墾地の見学 将来の四街道のパノラマをつくる		・乗法除法による一段階の問題 計算練習	山の遠足 1. 山はどうなっているか 2. 川はどうなっているか 上流中流下流の特徴 3. 川の水のはたらきはどうなっているか 4. 山や川はどんな石があるか 5. 私たちの身近にはどんな石が使われているか 6. 石にはどんなものがあるか 7. 花こう岩の研究 8. 粘土はどんなに役立つか 9. セメント工作をする			

（千葉大学千葉師範学校第二附属小学校『研究紀要第二集 本校における教育課程の研究』（1949）199 - 201 頁より筆者作成）

次に，以上のような２校の社会科カリキュラムの特色を当校の研究動向との関係から考察し，1948 年実験学校の社会科カリキュラム研究の傾向について言及したい。

4. 1948 年文部省教科書局実験学校における社会科カリキュラム研究の傾向

神奈川女子附小は，「現時，社会科中心のコーアカリキュラムや生活カリキュラムの台頭を見る時，社会科の立場が明瞭さを欠きつゝある」とし，「セパレート」の立場から，「社会科を他の教科とならぶ一教科」としてカリキュラムを構成した。だが，神奈川女子附小は，「コーアカリキュラム等を決して否定するものではなく，かえってこれを尊重するが故に，一部の学校の研究を検討し反省した」とする[28]。この背景の１つには，1947 年度の神奈川女子附小中の研究状況が関係していると考えられる。神奈川女子附小は，1947 年度に公立の城郷小学校を代用附属とし，二本立てで研究に取り組んだ。その際，大部分の教員は，城郷小学校に移動した状態で行われた[29]。城郷小学校では，「児童の営む具体的な生活（Life）活動（Activities）又は経験（Experiences）をカリキュラムの対象」[30]とし，生活カリキュラムによる「城郷プラン」を 1949 年３月までに作成している。

また，神奈川女子附小中は，研究紀要の内容を「地域社会の特質と児童の生活経験の特徴に立脚して，学習指導要領に掲げられた社会科の目標を達成するのに最も効果的な単元の構成」[31]としている。したがって，神奈川女附小中は，城郷小学校における生活カリキュラム研究の動向を踏まえながら，あくまでも地域と児童の実態を踏まえて，『補説』を手掛かりに研究を進めたと考えられる。

対して，千葉女子附小は，「本校は，従来社会科の研究を実践してきたし又生活力を高め実践力のある社会人の育成をめざす時必然的に社会科のねらっていることが他教科に比して総合性があり，この科を中心として位置づけることが最も自然な学習型態」[32]とし，「社会科のふくらまし」として教育課程全体を構想した。この背景には，1947 年実験学校として社会科の研究を行う中で，「社会科の学習をたんねんにやろうとすればするほど他教科との関連が内容の上でかさなり合ってきてその限界がはっきりしなくなってきた」ことと，「きめられた各科の時間数をみたす」ことに課題を抱えたことがある。

以上から，神奈川女子附小中は，コア・カリキュラムから教科へ，千葉女子附小は，教科からコア・カリキュラムへという社会科カリキュラム研究の過程を辿ったと言える。

このことについて，『内外教育版』第 161 号に載せられた「全国実験学校研究発表会（上）」によれば，発表会で研究成果を報告した学校は，「純粋コア派ともいうコア・カリキュラムの発展段階をつかんでいるものと，コアを一応通過した形で，生活カリキュラムから教科カリキュラ

ムへの逆行を示している批判的段階の二つに大別できる」[33] と報告されている。

これは，教科書局が指定した1948年実験学校には，一教科としての社会科実践と全教育課程におけるコアとして社会科実践という2つの動向が存在したことを意味している。こうした状況は，本稿で検討した神奈川女子附小中と千葉女子附小と重なるものである。

したがって，この時期の教科書局は，コア・カリキュラムと一教科という間で，社会科の実施を模索している最中であったことが分かる。

5．結語

本稿では，1948年実験学校の社会科カリキュラム研究の傾向について，社会科担当校による発表会での報告内容と研究成果の分析から考察してきた。主な成果は，次の点である。

1つ目は，1948年実験学校による研究は，1947年実験学校とは異なり，師範学校の附属小学校に，高等師範学校の附属小・中学校，公立の小・中学校を加え，小学校と中学校の一貫性や教科を越えた大規模なカリキュラム研究を推進したところに特色があったことである。その中での社会科研究は，神奈川女子附小中，千葉女子附小，温明小中を中心に，一教科かコア・カリキュラムのコアかという中で行われた。2つ目は，社会科担当校である神奈川女子附小中は，学習指導要領と地域性を踏まえながら，一教科として，千葉女子附小は，総合性を重視して，コア・カリキュラムのコアとして社会科カリキュラム研究を推進したことである。3つ目は，神奈川女子附小は，現状のカリキュラムの研究の進展のためにセパレートを採用し，千葉女子附小は，それまでの研究で抱えた問題を解決するために，コア・カリキュラムのコアとして社会科を研究した。神奈川女子附小は，一部の学校で行われるコア・カリキュラムに基づくカリキュラム研究の様子を批判的に検討し，将来の研究を見据えるために，セパレートにより，現在のカリキュラムを徹底的に研究した。対して，千葉女子附小は，1947年度に出てきた社会科と他教科との重複という問題を踏まえ，「社会科のふくらまし」としてカリキュラムを作成して実施している。

以上のように，実験学校では，コア・カリキュラムの長所と短所を考察し，コア・カリキュラムか，あるいは，一教科として社会科を行うか，という動きが見られた。ここから，当時の文部省は，単にコア・カリキュラムを否定していたのではなく，その有効性を実験学校での研究を通して見極めながら，社会科を実施しようとしていたと捉えることができる。そのため，1948年前後は，こうした研究がさかんに行われた時期であったと言える。

本稿は，神奈川女子附小中と千葉女子附小の研究成果に着目して，1948年実験学校の社会科カリキュラム研究の傾向を解明することを課題とした。そのため，社会科担当校がまとめた研究内容と研究成果を検討することに重点を置いたため，各校の詳細な研究過程を踏まえた分析は重視しなかった。次なる課題は，本稿の成果を踏まえ，『要領Ⅰ』と『補説』の具体化という観点から各校における研究過程とカリキュラム構造を考察することで，1948年実験学校の社会科カリキュラム研究の特質をより明確にすることである。

註

1）文部省『学習指導要領一般編（試案）』(1947) 1頁。

2）例えば，代表的な研究に次のものがある。市川博「民間教育運動団体の中の社会科」（浜田陽太郎，上田薫編 『教育学講座10 社会科教育の理論と構造』学習研究社，1979），小原友行『初期社会科授業論の展開』（風間書房，1998）。

3）近年の研究で，文部省とコア・カリキュラム連盟が密接な関係であったことが指摘されている。例えば，次の研究がある。金間国晴「戦後初期に『学力』の『低下』が意味したこと―〈学力調査〉から戦後新教育

の批判へ—」（苅谷剛彦，志水宏吉編『学力の社会学』岩波書店，2007）258頁。

4）1946，47年度の実験学校の指定と，各校の社会科教育研究の動向については，拙稿「文部省教科書局実験学校における社会科単元指導計画の作成—青木誠四郎の社会科教育論を手がかりに—」（日本社会科教育学会『社会科教育研究』第112号，2011）38－50頁，拙稿「東京第二師範学校男子部附属小学校における『作業単元』の導入過程—文部省教科書局実験学校による社会科単元指導計画作成の役割—」（日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』第21号，2012）1－14頁等を参照。

5）文部省教科書局実験学校連盟『生活カリキュラム構成の方法』（六三書院，1949）1頁。

6）東京教育大学内芸術学会が編集した『スクールアート』第1巻8号に載せられた「文部省実験学校研究発表会記」という記事によれば，文部省から指定を受けて研究に取り組んだ実験学校が一応の経過をとって来たものを一堂に会して夫々が熱心に発表され，充実した会であったことと，実験学校及び一般学校は全国に渉って広範囲なものだけに，会場は連日満員の盛況であったという。

7）1948年度実験学校の先行研究としては，次のものがある。鈴木健一『戦後社会科教育史』（歴史会出版，1975），小原友行「戦後初期における社会科教育実践の構造とその成立過程—奈良女高師附小・兵庫師範女子部附属小の場合—」（高知大学教育学部教科教育学研究会編『教科教育学の理論と実践』第一法規出版，1982），小山恵美子「昭和二十年代における経験主義国語教育—当時における先進的研究にみられる経験主義国語教育の検討—」（『国語科教育』第29号，1982），小原友行「奈良女子高等師範学校附属小学校の実践—しごと・けいこ・なかよしのカリキュラム—」（平田嘉三，初期社会科実践史研究会編『初期社会科実践史研究』教育図書センター，1986），坂井俊樹「敗戦直後における教育実践の分析—東京第三師範学校附属国民学校の社会科成立過程について—」（『東京学芸大学紀要 第三部門』第39号，1987），長岡文雄「終戦と『奈良プラン』の樹立」（社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第2号，1990），河野智文「昭和二十年代のカリキュラム研究における国語教育の試行—東京高等師範学校附属小学校のばあい—」（全国国語教育学会『国語科教育』第43号，1996），林尚示「戦後初期東京高等師範学校附属小学校のカリキュラムにおける学習参加形態—教科カリキュラム，広域カリキュラム，コア・カリキュラムの比較研究—」（日本学校教育学会『学校教育研究』第13号，1998），林尚示「戦後初期小学校実践における授業への参加—東京教育大学附属小学校のカリキュラムを中心として—」（『筑波大学教育学系社会科教育学グループ研究論文集 「参加型」授業に関する理論的研究』，1998），小原友行，前掲註2），若林身歌「後期『奈良の学習法』の樹立」田中耕治編『「総合学習」の可能性を問う—奈良女子大学文学部附属小学校の「しごと」実践に学ぶ—』（ミネルヴァ書房，1999），林尚示「戦後初期における東京高等師範学校・東京教育大学附属小学校の総合カリキュラム」（山口満編『現代カリキュラム研究』学文社，2001），岩崎紀子「池内房吉の『しごと』実践にみる教師の指導性」（滋賀大学教育学部社会科教育研究室『社会科教育の創造』第8号，2001），井上兼一「『奈良プラン』期の総合学習実践に関する一考察—倉富崇人の『しごと』実践—」（滋賀大学教育学部社会科教育研究室『社会科教育の創造』第8号，2001），本橋幸康「戦後新教育初期における教育評価についての考察—国語教育を中心に—」（『早稲田大学教育学部学術研究（国語・国文学編）』第54号，2006），芳我清加，原田省吾，佐藤園「『奈良プラン』（1948～52）にみられる家庭科の構想と展開（第1報）—『家庭科

的能力指導系統表』と『しごと』の実践を中心として―」(『日本教科教育学会誌』第29巻1号，2006)，芳我清加，原田省吾，佐藤園「『奈良プラン』(1948～52にみられる家庭科の構想と展開（第2報）―『けいこ―家庭―』を中心として―」(『日本教科教育学会誌』第30巻2号，2007)，横山ひろみ「第二次世界大戦直後の新教育―長野女子部附属小学校の試み―」(神戸親和女子大学『児童教育研究』第27号，2008)。

8）林尚示（2001)，前掲註7）113，114頁。

9）文部省教科書局「教科書局実験学校設置要項」(1948)。

10）信州大学教育学部附属松本中学校『信州教育の水脈：信州大学教育学部附属松本中学校五十年史 正編』(郷土出版社，1996）560頁。当校は，「一，社会科の発展として家庭科を考えること」「二，小学校・中学校一体としてカリキュラム構成をはかること」「三，実態調査を重視すること」「四，地域の実態に即応すること」をあげている。

11）文部省教科書局実験学校連盟，前掲註5）4頁。

12）海後宗臣・カリキュラム研究会編『日本カリキュラムの検討』(明治図書，1950）2頁。

13）文部省教科書局実験学校連盟，前掲註5）3頁。

14）文部省教科書局実験学校連盟『文部省実験学校研究発表会 要項』(1949）57頁。

15）文部省教科書局実験学校連盟，前掲註14）70頁。

16）文部省教科書局実験学校連盟，前掲註14）70頁。

17）文部省教科書局実験学校連盟，前掲註14）70頁。

18）文部省教科書局実験学校連盟，前掲註14）70頁。

19）文部省教科書局実験学校連盟，前掲註14）79頁。

20）神奈川師範学校女子部附属小中学校『国語科社会科カリキュラムの構成』(1949）1頁。

21）千葉大学千葉師範学校第二附属小学校『研究紀要第二集 本校における教育課程の研究』(1949）3頁。

22）神奈川女子附小中では，1947年度から「社会調査」を踏まえた作業単元の作成に取り組んでいる。山口一夫「社会調査と作業単元の展開」(『社会学習』第7巻第6号，1947）12－17頁。

23）山崎巳代治「社会科の実態調査の活用」(『学習活動』第2巻第5号，1949）28頁。

24）鶴見卓三「附属校の学区制」(『6・3教室』第3巻第6号，1949）48頁。

25）千葉大学千葉師範学校第二附属小学校，前掲註21）3頁。

26）神奈川師範学校女子部附属小中学校，前掲註20）85頁。

27）千葉大学千葉師範学校第二附属小学校，前掲註21）10頁。

28）神奈川師範学校女子部附属小中学校，前掲註20）5頁。

29）山崎は，のちに「附属にも二，三人の先生が残り本校の一隅で附属の命脈を保っていたのです。」と述べている。(「座談会『五十年をかえりみて』」(横浜国立大学学芸学部附属横浜小学校『創立五十周年記念誌』，1959）88頁。)

30）神奈川師範女子部附属横浜市立城郷小学校『城郷プラン』(1949）105頁。

31）神奈川師範女子部附属小学校「社会科単元及学習単元一覧表」(『学習活動』第2巻第2号，1949）巻末付表。

32）千葉大学千葉師範学校第二附属小学校，前掲註21）2頁。

33）「全国実験学校研究発表会（上)」(『内外教育版』第161号，1949）4頁。